2月17日（木）西洋哲学史2010年度最終授業後の放課後

作成者：想田瑞恵

檜垣先生（以下H）：やはり土浦の事件の被告に今のところ反論は思いつきませんね。対話は不可能という気がします。もちろんあきらめているのとは違う意味ですが。
想田（以下S）：「感受性の違い」や「世界観の違い」ということと何が違うのですか。
H：対話をするにはやはり何らかの意味での価値の共有は必要です。「感受性や世界観が違っている」という認識をまず共有しなくてはいけませんし、かつそこに価値を見出していないといけません。来年の哲学通論の授業では対話の話をしない代わりに、この土浦の被告の手紙を使おうかと思っています。今年の西洋思想では、「オンリーワンだ」という人を説得しようとして、一学期間ずっと対話の話をしていました。
S：対話の話にまったく触れないのはもったいない気がします。
H：もちろんそのつど触れることはしますが、あの手紙を扱うことで「人に納得してもらえるように話す」ということを意識させる方向したいと。「この手紙の書き手が間違っていると説得させるような論理を考えてください」という課題を想定しています。彼が自分の言っていることに本当に責任を持てるのだとしたら、実際は自分を正当化し守るための論理で自己欺瞞という気がしますが、対話においては「本当はこうだろう」とは言えないですしね。仮に持てるのだとしたら、それはあらゆることに意味も目的もないと考えているということです。その場合対話はできません。「人それぞれに価値観が異なり、それぞれに価値がある」という前提がないと対話は不可能です。そのため彼を説得することはできないでしょう。ただしそれは彼が正しいからではありません。また、本当に彼のような「脱社会的な存在」がありうるのかということや、意味も目的もないところからは出発できないだろうという疑問はありますが。彼に対する説得を考えてもらって一つ一つ反論していく。参加人数は減るかもしれませんが本格的な哲学の授業になるのではないかと思います。後はこれまでの授業の反省点として、結論が最後の最後まで見えないことがありました。しかも3学期には時間が足りなくなって早足になってしまう。そこで来年はカントのアンチノミーを先に持ってきて、科学批判を先にしようかと思っているんです。やはり「そうはいっても科学は正しいでしょ？」という雰囲気は1・2学期にありましたからね。手紙を導入に使って、次にカントのアンチノミーを取り上げて物体や科学の根拠について検討する。そして功利主義・ファシズムの話をして、アウグスティヌスの「なぜこの世に悪があるのか」に触れて「そうしないこともできる自由」につなげる。でも最後に大澤真幸を引用しつつ「実は決まっている」ということ、そして「神のようなものがいてはじめて自由になれる」ということを述べようかなと。

□□□□□□□□□

石田さん（以下I）：我々の視点からは選べるし迷っている状態にあります。ただこの選択は神によって決定させられているものなので、ある意味空虚な選択であるということです。
H：栗原さん今ので納得しましたか。
栗原さん（以下K）：それは本当に悩んでいることになるんでしょうか。悩むことも全て決まっているんですよね？
H：神によって選ばされたものの証として善き選択をしようとするわけですね。増田さんが「そうしないこともできる自由」により自己の物語が肥大化してしまい、結局引き受けられないというようなことを言っていましたが、これは良いですね。確かにそうした人は増殖していると思います。
K：でも結局はあらゆる行為は選択であり引き受けないわけにはいかないのではと思うのですが。
H：「こんなはずじゃなかった」と自分がした選択を悔やむことだってあるでしょう。「このことを事前に知っておけば選んだかもしれない」ということだってある。マイケル・サンデルも言っていましたが「騙された」と「情報不足」の境目は微妙です。そういう点からすれば、「自分が選んだことは無条件で引き受けなきゃいけない」というわけでもないとも言えるのではないでしょうか。「受け入れる」とい

う意味で「引き受ける」という言葉を使っています。「人のせいにする」ということは、受け入れてないということです。
S:わかる気はします。「選択や自分自身を承認してほしい」という強い欲求があります。そもそも承認は自分の意志でどうこうできるものではありませんし、しかも、その場その瞬間の偶然的な承認では自己肯定感の基盤が不安定になってしまいます。ですから普遍的な神的なものによる承認が必要になってくるわけで、この類比の承認ということで、真理を目指す対話における合意の積み重ねというものがあるのではないかということ。これが勉強会で確認できたことだと私は思っています。ここで運命というのを「普遍的な他者」と見なすと、承認の点から考えて運命論や決定論は大変魅力的です。自己決定においては、選択の支えとなるものも責任を引き受けるものも自己だけであり大変辛いです。自己を偶然的なものによる承認でしか支えられない人間ならなおさらです。なので運命という神的なものに支えられた自己というのはさぞ安定感があるだろうなと思い、その意味で「運命論を引き受ける」という考えは魅力的な気がします。けれどやはり「運命論を引き受ける」ということが「ありのままの自分を肯定する」とどこが違うのか、能動性はどうしたら見出されるのか、わからないんです。例えば努力とは「決まっているかどうかわからない」から「自分はもっと良くなれると信じて」行うものだと思うのですが。
H:「ありのままの自分の肯定」とは全然違うでしょうし、「神によって全て決まっている」ということは、努力しなくていいという話にはなりません。我々の主観にとっては決まっていなくて、次元が違うところで決まっているという感じですね。どう決まっているかはわからないからこそ努力をするわけです。「未来をよくしたいなら努力をする」と決定論であっても言えます。
S:「どう決まっているかはわからないからこそ努力をする」という考えは納得できる気もしますが、やはりもう少し考えてみます。

□□□□□□□□□

2011年4月19日(火)4限宗教哲学演習授業後
S:先週の木曜1限の西洋哲学史□の授業は参加者が多かったね。
I:ああ。昨年と比べればかなりね。
S:檜垣先生が授業の概観を解説した後「この先は授業に参加する人のために細かいところを説明していきますから、今までの話を聞いて『違うな』とか『無理だ』とか思った人は今のうちに退室してください」って言ったでしょ？そのとき実際かなりの人が席を立って本当にびっくりした。
I:「びっくり」って？
S:いや、だって普通、席立つとか思わないんじゃ。正直私は「こいつら何考えてるの？」的な気持ちでいっぱいだったんだけど…
I:そうは思わなかったな。むしろ「違う」と思ったら席立つのが当然だと思うし、意志表示がはっきりしていていいんじゃないかと。
S:えっ席立つの？
H:そこは席立つでしょう。
保呂先生:授業に求めていたものが違うならそうするでしょうね。

なぜ私は驚いたのかということと、「驚き」に同意が得られなかったことについて
　このとき受けた衝撃は勉強会以来のものだった気がします。「やはり自分は哲学向いてないな」と思うのもこういうときです。勉強会以来「関係」と「内容」という対立が私にはできました。これは社会でよく使うものとは違い、「内容」とは「実力」のことではありません。2月17日に発言したような「真理を目指す対話における合意の積み重ねによる承認」が「内容」です。会話や討論と違い対話は言葉そのものを尊重するということから来ています。そして「その場その瞬間での偶然的な承認」が「関係」です。共同体を選べるようになったことで関係が偶然的になってしまい、かつてのような固定的(普遍的)関係ではなく流動的なそれしか知らないということが背景にあるでしょう。

さて、勉強会では「授業には積極的に参加しており愛想もいいのに、やがて授業を切ってしまう人」というのが話題になりました。こういう人は「自分がオンリーワンであることを前提した関係作りを要請していて、それを受け入れない奴はもはや異物。関係を絶つ」という思考をしているのでは、という流れだったと思います。私には席を取った人たちが（実際はどうあれ）そうした「関係を切った」人のように見えたということです。「内容」でつながるなら、相手と内容が一致することがあればまた関係を結ぶこともできるでしょう。けれど、「空気のような関係」でつながっていたのなら、関係を切った時点で（席を立った時点で）周囲に「悪い印象」を与えてもかまわないと判断したということなので、関係を切った相手と再び関係を結ぶことはおそらくないでしょう。だからこそ私は彼らの行動に驚いたのです。

また「内容による関係」より「空気のような関係」に真っ先に思い至る自分、相対的であるはずの「空気」も実体のように感じる自分は、やはり哲学向いてないなと思います。「空気も実体」とは「空気」が「コミュニケーション能力」のように評価される形で扱われることではありません。むしろ「コミュニケーションの得手」が「足が速い」や「算数が得意」のような長所の一つとして相対的に扱われることと真逆にあります。「空気も実体」という前提の下「空気のような関係」の中で生きる人にあっては「コミュニケーション」は絶対のルールです。「コミュニケーション」を一つの能力として相対的に考える人は、「内容」ではなく「実力」と「関係」という図式を持っていることが多いようですね。先が見えないながらも、就活で学んだことの一つです。

今年は卒論を通してこうしたことを考えたいと思っています。特に「自由」と「偶然」の違いについてはっきりさせたいです。「かけがえのなさ」の根拠や対話の前提は「自由」だと思うので。それでは哲学通論で何かあればまた教えていただけると嬉しいです。